



ジャクソンのシネマハウスで会いましょう！

前橋市国際交流員 ジャクソン・バニスターの活動報告

令和8年8月

前橋市のミニシアター「前橋シネマハウス」。映画好きの国際交流員ジャクソンが、支配人おすすめの一本を観て、レビューをお届けします。映画は国境を超える！
皆さん、映画館でお会いしましょう！



8月の映画

『落下の王国 4Kデジタル
リマスター』

2006年 イギリス/インド/
南アフリカ



Jackson Bannister

群馬県前橋市の国際交流員
(CIR)として、日本人と外国人と
の文化的理解を深めるために活
動しています。



映画はもう一人の家族

～前橋の街で新たな映画の発見を。地域とつながりを持った映画館を目指します～



映画を通じて家族のようなつながりを地域の皆さんと作っていききたいという思いから“前橋シネマハウス”をオープンすることになりました。小さな映画館ではありますが、前橋の街なかから様々な映画を発信しています。上映が少ないミニシアター系の良作からシネコンで上映が終了したヒット作、お子様と一緒にファミリーで楽しめる作品、過去の名画など様々なジャンルから作品をセレクトし新しい映画を発見してもらえる。そんな“シネマハウス”をつくっていききたいと思います。

MISSION ————— 前橋千代田町五丁目1-16前橋プラザ元気21別館3階

落下の王国

夢が現実を塗り替える、映画という芸術の極致

今回の映画レビューでは、現在前橋シネマハウスで上映中の『落下の王国』を紹介します！

『落下の王国』は、まるで白昼夢をそのまま映像化したような作品だ。莫大な資金と、それを最後まで実現させるだけの執念を持った狂気じみた天才によって生み出された映画、とでも言えればいいだろう。普通なら「壮大すぎる野心作だったが、製作途中で頓挫した」という逸話の中でしか語られないような企画である。それが実際に完成し、私たちの前に存在していること自体が奇跡のように思える。

『落下の王国』は私がこれまで観てきたどの映画とも似ておらず、そしてこれまでレビューしてきた作品の中でも間違いなく最高傑作だった。

監督はターセム・シン。2006年公開の本作は、サイレント映画全盛期の1920年代カリフォルニアを舞台にしている。主人公は、撮影中の事故で寝たきりとなったスタントマンのロイ。彼は腕を骨折して入院している5歳の移民の少女アレクサンドリアに、一つの壮大な冒険譚を語り始める。『プリンセス・ブライド・ストーリー』や『ビッグ・フィッシュ』のように、本作は語り手と物語の境界を曖昧にしていく。私たちが目にする幻想世界はすべて物語を聞く少女の想像力によって形作られており、彼女は時折、大人の言葉や意味を誤って解釈する。その勘違いが、実に独創的な映像や演出へとつながっていく。

この映画は、たとえ完全に無音で観たとしても十分に魅了される作品だと私は本気で思っている。「一体どうやって撮影したんだ？」と心から首をかしげた映画はそう多くない。しかし本作では、その驚きが最後まで途切れることはなかった。20か国以上でほぼすべてロケ撮影が行われ、CGへの依存も驚くほど少ない。この姿勢、

実写のトリックだけで命知らずのスタントや映画的幻想を作り上げていた1920年代のスラップスティック・コメディをはじめとする初期映画への敬意の表れとも受け取れる。

映像美だけでなく、本作の色彩設計も息を呑むほど美しい。ここまで大胆に色彩を使った映画を観たのは、黒澤明監督の『乱』以来かもしれない。すべてのカットが、まるで巨匠の絵画に命が吹き込まれたかのようだ。物語世界の登場人物たちの衣装はほとんど変わらない一方で、背景となる風景は次々と姿を変えていく。その対比が実に見事である。また、鮮烈な色彩に満ちた幻想世界は、現実世界を彩る控えめな茶色や黄色、黒と対照をなし、物語の世界へ足を踏み入れるたびに、ほんの少しだけ現実から離れた「幻想」の感覚を観客へ与えてくれる。

シン監督の映画への愛情は、作品の隅々にまで行き渡っている。サイレント映画へのオマージュや初期の映写技術への言及、そしてCGではなく実際の撮影で壮大なスペクタクルを生み出そうとする姿勢。そのすべてを通じて、

『落下の王国』は映画という芸術そのものへのラブレターであることを何度も観客に思い出させてくれる。

物語そのものも、容赦なく心をえぐってくる。作品の感情的な核となるのはアレクサンドリアだ。彼女はあまりにも自然な無邪気さと率直な感情表現を見せるため、演技というより本当にその場で感じたことをそのまま映しているように思えてしまうほどである。

「彼女は本当に自分が映画を撮っていると理解していたのだろうか」とさえ感じる瞬間がある。ロイを演じたリー・ペイスもまた、わずかな視線や目の表情だけで複雑な感情を見事に表現している。この二人のやり取りこそが、すでに圧倒的に美しい映像作品へ確かな魂を吹き込んでいる。

作品の核心にあるテーマについては、感動の結末を損なわずに語ることが難しい。しかし、その中心にあるのは「物語ること」の力だ。物語は記憶を残し、経験を新たな意味へと作り変え、ときには耐え難い現実を生き抜く力さえ与えてくれる。本作は想像力を現実から逃避するための手段としてではなく、人生そのものを生きる価値あるものにしてくれる存在として描いている。

映画を愛する人なら、「もし予算に制限がなかったら、自分はどんな映画を作るだろう」と一度は考えたことがあるはずだ。『落下の王国』は、その問いに対するターセム・シン自身の答えなのだと思う。この傑作は、彼が長年にわたり私財を投じ、一切妥協することなく貫いた創造力の結晶である。本作が教えてくれるのは、本物の芸術的野心には今なお人々を驚かせる力があるということだ。ここまで妥協を拒んだ映画は滅多に生まれないし、生まれたとしても観客のもとへ届くことはさらに稀である。

総じて言えば、この作品は映画館で上映されるだけでなく、ルーヴル美術館に飾られていても何ら不思議ではないと思う。それほどまでに芸術性の高い作品だ。そして幸いなことに、今回の4Kレストアによって、私たちは再び映画史屈指の映像体験をスクリーンで味わう機会を得た。『落下の王国』は、私にとって「映画はここまで美しくなれるのか」という基準を永遠に塗り替えてしまった作品であり、これから先、映像美を追求するすべての映画を私はきっと本作と比べてしまうのだろう。